

Title	幼児期記憶の時間的体制化
Sub Title	Temporal organization of childhood memories
Author	尾原, 裕美(Ohara, Yumi) 小谷津, 孝明(Koyazu, Takaaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1994
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.40 (1994. ) ,p.27- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000040-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000040-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 幼児期記憶の時間的体制化

### Temporal Organization of Childhood Memories

尾 原 裕 美\*

*Yumi Ohara*

小 谷 津 孝 明\*\*

*Takaaki Koyazu*

When we remember of our own childhood days, we will find that we have little memories about the time before 3 years old. This phenomenon was called 'childhood amnesia' by Freud (1905). In this article, we attempted three experiments, focused on the factor of childhood amnesia. In experiment 1 and 2, we investigated the temporal organization of childhood memories, measured by confidential rating and response time. The results suggest that there is a qualitative difference between temporal organization of childhood memories and of children's episodic memories. In experiment 3, emotions to events in childhood days were compared with those in present days. It was shown that the former were more vivid and subjective than the latter.

自分が過去に経験したエピソードに関する記憶は、総称して自伝的記憶と呼ばれる。自伝的記憶がどのように体制化されているかについては多くの研究が行なわれている。Barsalou (1988), Williams and Dritschel (1988) は、自伝的記憶は記憶カテゴリーと時間フレームという2つの点で符号化されるという。また、Whitten and Leonard (1981) は、個人的記憶は時系列的に体制化されることがあるという。ただし、病気、休暇、パーティーといったカテゴリーやスキーマ、あるいは「特定期間」と呼ばれる人生の時期によっても体制化されているという。

一方、自分が幼い頃のことを想起するとき、ある一定年齢以前のことが想起できないことがある。この現象を最初に記述したのは Freud (1905/1953) で、彼はこの現象を幼児期健忘 (childhood amnesia) と呼んだ。

想起することができる一番幼い頃の記憶を最幼児期記憶と呼ぶが、この年齢は Freud によると 6・7 歳であるとされている。しかし、その後 Dudycha and Dudycha (1941) は 3.5 歳であるとしており、最近の研究はこの

年齢を支持している (Kihlstrom & Harackiewicz, 1982; Pillemer & White, 1989)。また、幼児期健忘は一般的に、記憶がない 0-3 歳の時期と記憶が乏しい 3-5 歳の 2 つに分けられる (Wetzler & Sweeney, 1986)。

幼児期健忘がなぜ起こるのかについては、Freud が提唱した抑圧説をはじめとして、アクセス不能説、忘却説、子どものエピソード記憶能力の欠如による説など、様々な説が提唱されている。しかし、最近では子供の記憶能力が従来考えられていたよりもはるかに優れていることを示す研究が多くなされ、以上に示した説についても異論がなげかけられている。例えば Nelson (1986) は、21ヶ月児でも大人と類似したスキーマに基づいた想起を行なうことを示し、Hamond and Fivush (1991) は、4歳児は2歳の時にディズニーランドに行ったことを想起できることを示した。最近では、潜在記憶から顕在記憶への移行による説、自己概念と自伝的記憶の生起による説、エピソード記憶と自伝的記憶による説、エピソード記憶と時間記憶による説などが提唱されている (それぞれの説の詳しい説明については、尾原・小谷津, 1994a 参照)。

幼い頃には想起できたであろう様々な出来事を、大人

\* 社会学研究科心理学専攻博士課程 (認知心理学)

\*\* 慶應義塾大学文学部教授 (心理学)

になってから想起できなくなるのはなぜだろうか。尾原 (1994)、尾原・小谷津 (1993) は、自伝的記憶における複数の時間軸を想定し、幼児期においてはこれらの時間軸がまだ完成していないために、複数の出来事間の時間的関連が維持できないのではないかと考えた。つまり、子供は複数の社会に属するようになると、例えば幼稚園における時間の流れと家庭における時間の流れとを別に作り上げているのではないかと考え、この複数の時間の流れをそれぞれの“時間軸”と呼んだ。そして、これらの複数の時間軸ができた最初の頃は時間軸どうしは独立した流れであるが、成長するにつれて、複数の時間軸どうしに接点ができる、つまり異質の時間軸が統合されるようになり、1つの時間の流れに統合されるのではないかと考えた。時間軸が成立していない非常に幼い時期は、エピソード間に時間的つながりをもたせることができないために、個々のエピソードを当時はおぼえていたとしても、長期間保持することができない、あるいは後に想起できなくなってしまうのではないかと (幼児期健忘の第一段階)。そして、複数の時間軸が独立した個々の流れしかもたない時期には、エピソードの相互関連づけが希薄となるため、多数のエピソードを長期間保持することは難しい、あるいは後に想起できなくなってしまうのではないだろうか (幼児期健忘の第二段階)。

尾原 (1994) は、子供のエピソード記憶が時間的、空間的にどのように体制化されているかについて考察した。そして、子供が複数のエピソードを時間的に体制化できるようになるには、いわゆる距離処理の獲得と相対順序処理の獲得という2段階が存在すること、およびその時期はほぼ6歳頃であることを示した。一方、個々の時間軸内での時間的体制化はほぼ4歳頃になされるということを示唆した。そこで本研究では、同様の時間的体制化が、大人になってから想起される幼児期のエピソードについても成り立っているかどうかについて検討する。更に、先にあげた仮説のように、時間的体制化が行なわれないために多くのエピソードを保持されないのであれば、幼児期の時間的体制化と幼児期記憶の時間的体制化は、質的に異なる構造になっているのではないかと。つまり、後に想起することのできる幼児期記憶は、複数の時間軸間の時的体制化がなされた少数の記憶の一部なのではないかと考えられる。

## 実 験 1

### 方法

被験者 慶応義塾大学心理学専攻 3, 4 年生 11 名。

手続き 実験室で個別に実験を行なった。最初に5cm×9cmの白いカードを30枚渡し、小学校に入学する前に起こった出来事でおぼえているのを、1つのカードに1つずつ記入して貰ってもらう。カードの裏には番号がふってあり、出来事の想起順がわかるようになっていた。実験開始と同時に実験者は実験室を出て、30分後に一度戻ってくるので、時間が足りない場合、またはカードが足りない場合にはその時に申請するように言っておいた。また、過去の習慣や繰り返し起こった出来事は省くように教示した。

想起終了後、各出来事のカードをいくつかのまとまりに分類してもらった。その後、まとまり毎に出来事が実際に生じた順序に机の上にカードを上から順に並べ変えてもらった。一般的出来事等の順序を判断できない性質の出来事は除外してもらった。

一つのまとまりについて並べるたびに、ある特定の出来事そのまとまりの中でその位置にあるという確信度評定を行なった。評定は、‘1: 全く自信がない’から‘7: 非常に自信がある’までの7段階評とした。

全てのまとまりについて確信度評定が終わった後、あるまとまりの中の1枚を、別のまとまりの順序の中のどの位置に入るか判断し、その確信度評定を7段階で行なった。これを全出来事について行なった。

### 結果

想起された出来事の種類 6名が、家族や親類に関する出来事、幼稚園に関する出来事、その他の出来事 (複数の場合もある) に分類を行なった。3名は、家族に関する出来事を細かく分類していたので、できるだけ少ないまとまりになるようにまとめなおしてもらったところ、その結果として、先の6名の種類と同様の分類となった。1名は、家、友達、の分類の他に、いい思い出、恥ずかしい思い出等の感情による分類を行っていたため、それらを感情以外の分類でまとめなおしてもらい、同様の分類になった。最後の1名は、初めに特定の出来事と日常の出来事に分類した。そこでもう一度やりなおしてみたが、感情による分類を行ない、先のような分類にはならなかった。

最後の1名を除く全員に共通するまとまりは家族に関する出来事、幼稚園に関する出来事であった。この2つのまとまりについての分析が行なわれた。

出来事の想起個数 想起された出来事の平均は21.7個であったが、個人差がかなり大きかった ( $SD=8.36$ )。家族に関する出来事の平均は10.7個 ( $SD=5.11$ )、幼稚園に関する出来事の平均は7.2個 ( $SD=3.66$ ) で、1要

Table 1. 出来事の順序判断の確信度評定値の平均

	家	幼稚園
カテゴリー内	4.93	4.91
カテゴリー間	4.99	4.38

note. 表中数値は7段階評定値の平均値である。

因分散分析の結果、家族に関する出来事の方が多く想起された ( $F(1, 10)=7.737, p<.05$ )。

順序判断の確信度評定値 まとまりの中の出来事の数が少なすぎる場合、確信度に影響が出ると考えられるので、まとまりに含まれる出来事が3件以下である被験者は除外した。結果、感情によって分類した2名を除外し、9名のデータの分析を行なった。確信度評定値の平均を Table 1 に示す。

2(出来事カテゴリー: 家・幼稚園)×2(カテゴリー内・カテゴリー間) の2要因分散分析を行なったところ、主効果、交互作用ともに有意ではなかった。

以上の結果から次のことが結論される。1) エピソードの分類から、幼児期記憶は家、幼稚園という2つのカテゴリーに分類されているといえる。しかし、2) 確信度評定値の結果からは、時間軸内のエピソードの順序判断と時間軸間のエピソードの順序判断には差があるとはいえない。

ところで、自伝的記憶の研究では、アクセス可能性の尺度としてしばしば反応時間が用いられる (Conway, 1991; Fitzgerald, 1980; Fitzgerald, 1981)。そこで実験2では、反応時間を指標として、幼児期記憶の時間的体制化には時間軸によって差がみられるのかどうかについて検討する。

## 実験 2

### 方法

**被験者** 実験1の被験者のうち7名。

**手続き** 実験1の数週間後、幼稚園に関する出来事で古いもの2つ、新しいもの2つ、家に関する出来事で古いもの2つ、新しいもの2つ、計8つの出来事を選び、どちらの出来事が先に起こったかの判断を行ない、その反

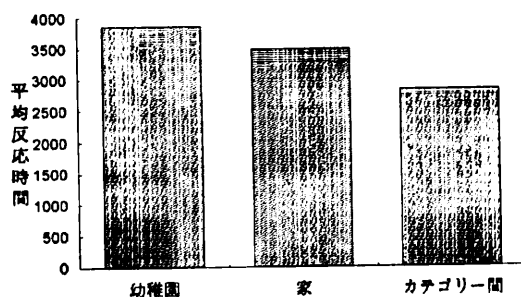


Figure 1. カテゴリー毎の平均反応時間 (ms)

応時間を求めた。出来事の組み合わせは、家に関する出来事どうし、幼稚園に関する出来事どうし、カテゴリー間の出来事どうし、その中でさらに古いものどうし (以下古近と記述)、新しいものどうし (以下新近と記述)、古いものと新しいもの (以下遠と記述) の組み合わせを行なった。実験は NEC-PC9801VM で行なわれ、画面の左と右に1つずつ、被験者が以前記述した出来事が提示された。被験者はキーボードの 'x' と 'j' の上にそれぞれ右手と左手を置き、先に起こったと思われる出来事の方のキーを、できるだけ正確に押すように教示された。左右の提示位置を変えて計 56 試行を行なった。

### 結果

3(距離: 古近・新近・遠)×(カテゴリー: 家・幼・カテゴリー間) の2要因分散分析を行なったところ、カテゴリーの主効果が有意で ( $F(2, 12)=4.72, p<.05$ )、Tukey 法による多重比較の結果、幼稚園どうしの反応時間はカテゴリー間の反応時間よりも有意に長かった ( $p<.05$ )。また、有意な差はみられないものの、カテゴリー毎の反応時間の平均は、幼稚園が 3864 ms、家が 3486 ms、カテゴリー間が 2829 ms の順に短くなる傾向がある (Figure 1)。

以上、反応時間を指標とすれば、幼児期記憶の時間的体制化には、時間軸による違いがみられることがわかった。

ところで、記憶研究において、想起順序とその体制化には関連があるとされている。そこで次に、実験1のデータをもとに、想起順序と時間軸について分析を行な

Table 2. 当時の各感情の全体に対する割合

	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	恐れ	驚き	感情なし	その他
家	0.30	0.13	0.04	0.07	0.18	0.09	0.07	0.10
幼	0.33	0.05	0.00	0.07	0.14	0.10	0.17	0.14
全体	0.31	0.10	0.03	0.07	0.17	0.09	0.10	0.12

う。想起順序と実際エピソードの生起順序、出来事が属するカテゴリーは関連があるかどうかについて検討する。更に、個々のエピソードに付随する感情について後日質問紙調査を行なうことによって、想起順序と感情には関連があるかについても調査を行なう。

### 実 験 3

幼児期記憶の時間的体制化と想起順序の関連について検討する。想起順は、実際の生起順、出来事カテゴリー、感情と関連があるであろうか。また、感情を想起するとはどういうことだろうか。ある出来事に付随する感情を思い出して下さいと言われた際、記述されるのは、当時持っていたと思われる感情なのだろうか。そもそも、「感情を想起する」とはどういうことなのか、実験3では、幼児期記憶について当時持っていた感情と現在持っている感情とを別々に評定することにより、「感情の想起」について検討する。

#### 方法

**被験者** 実験1の被験者のうち7名。

**手続き** 実験2の数週間後、各出来事についてもっている感情について質問紙調査を行なった。感情は、6種類の基本的な感情認識を対象とし、a. 喜び、b. 悲しみ、c. 怒り、d. 嫌悪、e. 恐れ、f. 驚き、g. 感情なし、h. その他（自由に記述）の8つに分類した。そして、当時その出来事について持っていたと思われる感情、現在その出来事について持っている感情の2種類について記述した。複数の感情が当てはまる場合には複数解答も可とし、その場合、特に強く持っている感情に○をつけるようにした。また、その出来事を経験した年齢がわかる場合には、その年齢も判断してもらった。

#### 結果

##### 最幼児期記憶の年齢と種類

最幼児期記憶は3歳か4歳であった。また、一人を除いた全員の最幼児期記憶は家に関する出来事であった。

##### 感情

**当時の感情** 当時その出来事について持っていたと思われる感情を8つのカテゴリーに分類し、各カテゴリーが全体に占める割合を Table 2 に示す。複数回答の場合

合には、○がつけられた1つのみを分析の対象とした。エピソードが属するカテゴリーによる感情の差はみられない。全エピソードカテゴリーにおいて、喜びの占める割合が高くなっている。また、喜びをポジティブ、悲しみから恐れまでの感情をネガティブとしてまとめると、ポジティブ、ネガティブの感情が全体に対して占める割合はそれぞれ 0.31, 0.42 となり、当時の感情評定は、中立的（感情なし、あるいは h. の客観的感情）ではなく、何らかの感情によって特色付けられていること、そして、ポジティブ、ネガティブの違いはみられないとがわかる。

**現在の感情** 現在各出来事に関してもっている各感情が全体に対して占める割合を Table 3 に示す。当時の感情と同様に、出来事が属するカテゴリーによる感情の違いはみられない。感情の伴わない記憶の割合が高くなっており、この中には、なつかしい、当時の自分がかわいそう、といった、当時の自分を客観的に眺める感情が大部分であった。ポジティブ、ネガティブに分けると、それぞれの割合は 0.22, 0.14 となり、両方もかなり低く、差はみられない。現在もっている感情の評定は、感情を伴わないか、客観的な感情のみを持っていることが多いといえる。

**当時の感情と現在の感情** 当時の感情と現在の感情を比べてみると、まず、当時の感情に比べて現在の感情は、新鮮な感情を伴っていないものが多くなっている。また、当時の感情ではポジティブ、ネガティブの占める割合がそれぞれ 0.31, 0.14 であったのに対して、現在の感情のそれぞれの割合が 0.22, 0.14 で、ネガティブな感情の占める割合の減少が大きい (Figure 2)。ポジティブな感情よりも、ネガティブな感情の方が、時間がたつにつれて感情が薄れる傾向があるようである。

次に、想起順が出来事の属するカテゴリーや感情による連想の影響を受けているかどうかについて分析する。

**カテゴリーの切り替え** 想起中にカテゴリーが切り替わった率の平均（切り替え数/想起数 - 1）は 0.48 で、かなり頻繁にカテゴリーの切り替えが行なわれていたといえる。しかし、全てが2,5個ずつ切り替わっているわけではなく、5,6個続いてその後1個おきに切り替わる

Table 3. 現在の感情の全体に対する割合

	喜び	悲しみ	怒り	嫌悪	恐れ	驚き	感情なし	その他
家	0.22	0.00	0.00	0.03	0.06	0.04	0.34	0.30
幼	0.21	0.00	0.02	0.05	0.02	0.02	0.36	0.31
全体	0.22	0.00	0.01	0.04	0.05	0.04	0.35	0.30

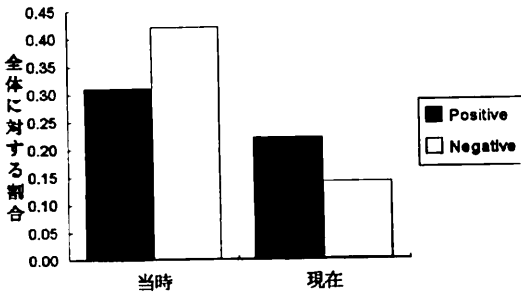


Figure 2. ポジティブな感情とネガティブな感情の、全体に対する割合

というような状態もみられた。必ずしも同じカテゴリーから順に想起されるとはいえないことがわかった。

また、同じ感情の出来事を続けて想起することはめったにみられなかった。

更に、切り替え前の出来事と切り替え後で感情が同じである率(感情が同じ個数/切り替え数)は、当時の感情では平均0.14、現在の感情では平均0.03であった。ただし、h.その他、が続いた場合は、同じ感情として数えなかった。カテゴリーの切り替えには感情は関係がないといえる。

想起順には、感情はあまり関係がなかった。同一カテゴリーに含まれる出来事が続けて想起されることもあったが、その想起順は実際に出来事が起こった順序とは関連がなかった。出来事の想起には、感情、出来事の属するカテゴリー、実際の生起順序以外の連想が働いているのだろうか。

カテゴリー内における出来事の生起順序と想起順の順位相関 家における順位相関係数の平均は0.46、幼稚園における順位相関係数の平均は0.44で、出来事の実際の生起順序とカテゴリー内における想起順序には関連がないといえる。ケンドールの順位相関係数を用いた。

### 総合考察

以上の諸結果に対し、感情・想起順・エピソードの体制化等の視点から、総合的な考察を行なうと以下のようになる。

#### 感情

あるエピソードを想起する際、その出来事を経験したときの感情状態と同じ感情状態におかれると、その出来事を想起しやすくなる (mood-state-dependent memory)。ここでは、エピソードから感情を想起する場合を考えてみる。ここで、感情を想起するという事について

て、1) 当時の感情そのものが、時間経過を経て薄まったものなのか。2) 現在自分の中に起こってきた感情の変化は関与しないのだろうか。という2つの問題が考えられる。Table 2 と Table 3 をみても、各感情は Table 2 よりも Table 3 において低い割合を示している。この変化原因は何だろうか。もし1)のように、当時の感情が一定時間を経た現在という時点では一様に薄れるということがあるとするれば、どの感情においても同様な変化がみられるはずである。しかし、喜びを除く各感情は、Table 3 において極めて0に近くなっているけれども、喜びはそれにあてはまらない。つまり、忘却の仕方が、各感情において一様ではないということである。そうだとすれば、以下のような解釈が可能かもしれない。Freud 的な解釈をすれば、1) 不快感情は中立的な感情へと抑圧されていく傾向がある。そして、2) その抑圧傾向は、自己を肯定する防衛機制的意味あいを持つ、と考えることもできる。幼児期記憶の感情の想起(当時)は、不快な感情の想起は快の感情の想起よりも量的には大きいものがある。しかし、幼児期において持っていた快の感情の保持は、不快な感情の保持よりも高いものがあるのである。

#### 想起順

幼児期記憶が体制化されているかどうかは、想起順序があるまともをもった傾向をしているかどうかによる。つまり、想起されてくる事柄の系列的特性、すなわち想起内容が同一のカテゴリーに属するものが続き、続いてまた異なるカテゴリーに入ると、そこで連続した想起がみられるといったような傾向がみられるかどうかを検討するわけである。そこで今回の実験では、この観点から、感情、カテゴリー、エピソードの生起順等について、実際の想起順序との関連をみてみたわけであるが、どれも関連があるような傾向はみられなかった。これは、これらの要因によって幼児期記憶が体制化されていないことを示しているのではなかろうか。

想起順序と各要因の間に関連がみられなかった原因として、次のことが考えられる。被験者は、出来事を想起する際に、ランダムな手がかり、あるいは手がかりなしで検索していたのではないかと。検索過程においてカテゴリー自発が難しく、関連手がかりがない状態で検索を行なったために想起順序との関連がみられなかったのではないかと。これは記憶の体制化の問題ではなく、有効な手がかりがない検索方略の問題だと考えられる。事実、想起されたカテゴリーとしては家、幼稚園に関するものが多く認識されており、これらのカテゴリーによって体制

化されているといえるのである。

一方, Wagenaar (1986) は, 過去に経験した出来事のうちの一つを想起手がかりとして, 別の出来事を想起する実験を行なった。その結果, 想起できた出来事の大部分が, 2つの出来事の間に関連のあるもので, ある出来事と同じ月に起こった出来事など, 時間情報の連想による想起が行なわれることはほとんどなかった。このことから Wagenaar (1986) は, 時間の関連は有効な想起手がかりとはならないのではないかと示唆している。このことは, 本研究が幼児期の記憶の時間的体制化を扱っているという点について, 批判的な意味あいを持っているかもしれない。しかし, Wagenaar の扱っている時間とは, 出来事が生じた“点”としての時間情報である。それに対して, 今回の実験で扱った時間情報とは, 出来事どうしの相対的な順序についてのものである。つまり, Wagenaar がいっている想起手がかりにならない時間情報とは, 今回の実験における時間情報とは異質のものである。事実, 実験1・2の被験者は, 幼児期の記憶の順序関係(時間情報)を想起し, 報告することができた。

#### エピソードの体制化

想起された出来事の種類から, 幼児期の記憶内容は, 家と幼稚園という2つのカテゴリーにほとんど集約されているといえる。しかも, 反応時間からすると, カテゴリー間の出来事(家の出来事と幼稚園の出来事), 家の出来事(家の出来事と家の出来事), 幼稚園の出来事(幼稚園の出来事と幼稚園の出来事)の順で出来事どうしの順序を想起しやすいことがわかった。尾原・小谷津(1994b)においても, カテゴリー間の出来事どうしの順序判断はカテゴリー内の出来事どうしの順序判断よりも反応時間が短くなっており, 今回の結果を支持している。幼児期記憶において独立であったカテゴリー別の時間軸が, 成人とともに統合されてゆく結果, 異質のカテゴリー間をつないでいる情報がより想起されやすくなるということなのかもしれない。また, 尾原・小谷津(1994b)では, 小学校時代の記憶の時間的体制化と幼稚園時代の記憶の時間的体制化についても比較してみた結果, これらの間にも違いがみられることがわかった。更に成長した時期の記憶の時間的体制化も調べることによって, この違いが幼児期健忘と関連があるのかどうか検討する必要があるだろう。

#### 引用文献

Barsalou, L. W. 1988 The content and organiza-

tion of autobiographical memories. In U. Neisser & E. Winograd (Eds.), *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to study of memory*. Cambridge University Press. Pp. 193-243.

- Conway, M. A., Cohen, G., & Stanhope, N. 1991 On the very long-term retention of knowledge acquired through formal education: Twelve years of cognitive psychology. *Journal of Experimental Psychology: General*, **120**, 395-409.
- Dudycha, G. J., & Dudycha, M. M. 1941 Childhood memories: A review of the literature. *Psychological Bulletin*, **38**, 668-682.
- Fitzgerald, J. M. 1980 Sampling autobiographical memory reports in adolescents. *Developmental Psychology*, **16**, 675-676.
- Fitzgerald, J. M. 1981 Autobiographical memory: Reports in adolescence. *Canadian Journal of Psychology*, **55**, 1697-1709.
- Freud, S. 1905/1953 Fragment of and analysis of a case of hysteria. In Strachey, J. (Ed.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (Vol. 7). London: Hogarth Press.
- Hamond, N. R., & Fivush, R. 1991 Memories of Mickey Mouse: Young children recount their trip to Disneyworld. *Cognitive Development*, **6**, 433-448.
- Kihlstrom, J. F., & Harackiewicz, J. M. 1982 The earliest recollection: A new survey. *Journal of Personality*, **50**, 134-147.
- Nelson, K. 1986 *Event Knowledge: structure and function in development*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 尾原裕美 1994 (未公開) 記憶における時間的体制化の発達と幼児期記憶の持つ意味 慶應義塾大学修士論文。
- 尾原裕美・小谷津孝明 1993 出来事記憶とその順序判断 日本心理学会第57回大会発表論文集, 548.
- 尾原裕美・小谷津孝明 1994a 幼児期健忘に関する理論と今後の展望 哲学第97集, 155-172.
- 尾原裕美・小谷津孝明 1994b 自伝的記憶の時間的体制化 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 413.
- Pillemer, D. B. 1984 Flashbulb memories of the assassination attempt on President Reagan. *Cognition*, **16**, 63-80.
- Pillemer, D. B., & White, S. H. 1989 Childhood events recalled by children and adults. In H. W. Reese (Ed.), *Advances in child development and behavior* (Vol. 21). San Diego, CA: Academic Press. Pp. 297-340.
- Wagenaar, W. A. 1986 My memory: A study of autobiographical memory over six years. *Cognitive Psychology*, **18**, 225-252.
- Wetzler, S. E., & Sweeney, J. A. 1986 Childhood

- amnesia: An empirical demonstration. In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Cambridge, England: Cambridge University Press. Pp. 191-201.
- Whitten, W. B., & Leonard, J. M. 1981 Directed search through autobiographical memory. *Memory & Cognition*, 9, 566-579.
- Williams, J. M. G., & Dritschel, B. H. 1988 Emotional disturbance and the specificity of autobiographical memory, *Cognition and Emotion*, 2, 221-234.